

# チェルノブイリの子どもたち

チェルノブイリ子ども基金 NEWS No. 134 2026 年 6 月 18 日発行



チェルノブイリ原発事故から 40 年・福島原発事故から 15 年

「チェルノブイリと福島 何が問われているのか」

講演会とパネルディスカッション 2026 年 5 月 23 日



●主催：チェルノブイリ子ども基金

●共催：明治学院大学国際平和研究所

●協賛：未来の福島こども基金、チェルノブイリ・福島医療基金、市民が育てるチェルノブイリ法日本版の会

●会場：明治学院大学白金校舎（東京都港区）

写真左より：小出裕章氏 菅谷昭氏 柳原敏夫氏 佐々木真理 小寺隆幸（チェルノブイリ子ども基金）

1986 年のチェルノブイリ原発事故による放射能は、今も人々の健康と環境をむしばみ続けています。その 25 年後に福島で同規模の事故を起こしてしまった私たちは、今、チェルノブイリから何を学ぶべきでしょうか？ チェルノブイリ子ども基金は明治学院大学国際平和研究所と共催で「チェルノブイリと福島 何が問われているのか」と題し講演会・パネルディスカッションを開催しました。第一部では初めに小出さんに両方の事故について、本質的な問題を語っていただきました。続いて子どもたちに焦点を当て、ベラルーシで多くの甲状腺手術をされた菅谷さん、「311 甲状腺がん裁判」の原告の若者たちに弁護士として接してきた柳原さん、長年チェルノブイリの子どもたちの保養に付き添い見守ってきた「チェルノブイリ子ども基金」事務局長の佐々木が講演を行いました。第二部では「311 子ども甲状腺がん原告の声」の音声をお聴きいただき、その後パネルディスカッションを行いました。

※当日の映像は、下記 URL、または右の QR コードよりご覧いただけます。

<https://www.youtube.com/watch?v=GT5R1s36z6o>

資料は子ども基金 HP で公開しています。

- ◆小出裕章 「チェルノブイリ事故と福島が私たちに問うもの」
- ◆菅谷昭 「ベラルーシでの甲状腺がん治療の経験から福島の今を考える」
- ◆柳原敏夫 「311 子ども甲状腺がん裁判で問われていること」
- ◆佐々木真理 「現在も続くチェルノブイリ救援活動について」
- ◆パネルディスカッション



～～ 本号の目次 ～～

- p. 2～8 小出裕章さん講演録
- p. 9～12 菅谷昭さん講演録
- p. 13 チェルノブイリの歌声

- p. 14 ウクライナからの便り
- p. 15 ウクライナ・ナロジチの子どもたち
- p. 16 里親のページ ベラルーシの子どもたち
- p. 17 募金・救援状況
- p. 18 事務局から

## 小出裕章 講演 「チェルノブイリ事故と福島が私たちに問うもの」



チェルノブイリの事故からもう 40 年という時間が流れてしまいました。福島の事故から 15 年、それでも一向に国は反省しないという、この世界は何たることかと私は思ってきました。今日これから私の後に続いて、菅谷

さん、柳原さん、佐々木さん、それぞれの現場ですと長く活動をしてくださった方が発言をしてくださるということで、私は彼らの露払いだけさせていただきますと思います。

まず、40 年前に壊れてしまったチェルノブイリ原発の写真です。「チェルノブイリ核（原子力）発電所事故」と書きましたが、普通は「原発」と呼ばれますし、私自身もその言葉に慣れ親しんでしまっそう言ってきたわけですが、本当だったら「核発」と呼ばなければいけないと思っています。この原子炉の中で核分裂の連鎖反応が制御できないまま、急激に進んでしまった核暴走という形の事故が起きました。建屋が吹き飛んでしまうという大変な事故でした。

チェルノブイリ核発電所、そのごく近くに沢山の集合住宅があるんですが、ここはチェルノブイリ核発電所で働く労働者たちの住んでいたプリピャチと名前のついた町でした。4万5000人ほどの人たちがここで生活しながら原発の運営をしていたわけですが、核発電所が爆発してしまって街は一挙に廃墟となりました。廃墟となったプリピャチはもちろん無人で、木がどんどん伸びてきて、何年か後には町自身が木に覆われてしまいました。

事故が起きたときに、「避難をしなさい」と言われた人たちの姿です。1000 台を超えるバスが周辺に差し向けられ、「手荷物だけ持ってそのバスに乗れ」と指示を受けて、住民たちがバスに向かっている。鍋

だかやかんのようなものを一つだけ持って、バスに向かっている女性。猫を抱いているこの人はたぶん、「自分の一番大切なものを持って避難しろ」と言われたときに猫を残すことができずに、猫だけ抱いて——そしてこれは猫に餌をやるための鍋ではないかと私は思っているんですが。その後ろの女性は荷物を2つ持って、コートを手にかけて泣きながら、そういう形で住み慣れた家を捨てて逃げる、ということをした。そして二度と戻ることはできないとなった。もちろん膨大な放射能で汚れているわけですから、避難をしなければいけない。でも避難をするということは、生活が根こそぎ破壊されてしまう、そういうことなんです。こういう悲劇が何万、何十万という形で起きたわけです。



チェルノブイリ原子力発電所。一体どういふところなのかというと、当時のウクライナ共和国にあって、北側に白ロシア共和国。さらに東側にはロシア共和国がある、そういう位置関係です。ウクライナ共和国、白ロシア共和国、ロシア共和国、3か国が重なり合うようなところで事故は起きた。

それぞれの共和国の首都は、ウクライナがキエフ、白ロシア共和国——今はベラルーシと言いますけど——首都のミンスクがあります。ここは菅谷さんが長い間住んで、子どもたちの治療に当たったところです。放射能がどんなふうに広がったかが色分けして描いてあります。原発からの距離が円で描いてあ

りますが、まず100キロ、一番外側は700キロです。濃く赤く塗ったところが、事故当初、とにかく逃げろと言われて逃げた、強制避難させられた地域。青いところも含めて、法令を守るなら本当は人が住んではいけない、放射線管理区域に指定して、全部逃げなければいけないというほどの汚染を受けたところです。その範囲はなんと700キロ近くまで。そんな事故になってしまった。当初は赤いところだけ避難させていたんですけれども、やはりそんなことではまずいということで、青いところの人たちも。「避難しろ」と言われている人もいますし、避難したければ権利を認める、生活の保障はする、というような法律が後から作られた地域です。

そして今から15年前、2011年3月11日に事故を起こした福島第一原子力発電所。真ん中に写っているのが3号機、その右側が4号機。左側の2と書いてあるのが2号機、もう一つ左に1号機がある。事故当時は1号機、2号機、3号機と3つの原子炉が動いていて、地震と津波に襲われてこんな姿になってしまって、炉心から大量の放射能を噴き出させた。4号機は、定期検査で停止していたんですけれども、ちょっとした理由があってこんなにぼろぼろに壊れてしまいました。

もともとこの福島第一原子力発電所というのは、国や東京電力によれば、「ぜーったいに安全だ」「事故なんか起こさない」と言われていた発電所でした。でも本当のことを言うと、原子力発電所が事故を起こしたら大変だ、どうしようかと考えて、原子力発電所だけは都会には建てない、過疎地という選択をした上で福島に押し付けたのが、この発電所。この発電所で起こされた電気のほとんどは東京に送られるというようなことで進められてきた。

では福島の事故でどんな汚染を受けたのか。国が作った汚染地図、どこがどれだけ汚れたかということ、色の濃淡で色分けしてあります。福島第一原発からの距離がどのくらいかというのが円で描いてあって、250キロ、350キロ、450キロとあります。東京は約250キロ圏内に入ってしまう。第一原発から北西

の方向に赤、黄、緑の色で塗ったところがありますが、この地域は猛烈な汚染を受けたところです。なぜかという、事故から数日たった後に南東からの風が吹いていて、その風に乗って放射能が北西に流れていきました。そして運が悪かったことに、その日ここで雨と雪が降った。みなさん、『黒い雨』という小説をご存じでしょうか。井伏鱒二さんの小説で、広島の実験が炸裂したときにキノコ雲から雨が降ってきた。それが黒い雨だった。それに打たれて、また多くの人が被曝をしたということをテーマにした小説ですけれども、同じことが福島で起きた。大量の放射能が洗い流されて、地面に降って、こんな汚染地帯になった。

事故当日、日本の政府は「原子力緊急事態宣言」なるものを発令して、ほぼこの赤、黄、緑で塗った猛烈な汚染地帯から15万人を超える人々を強制避難させました。先ほどのチェルノブイリの事故で起きたことと同じように、「3日分の手荷物を持ってバスに乗り」と言われてバスに乗ったら最後、二度と戻れないということになったのは、こういう地域の人たちです。数字でいうと、約1平方メートル当たり60万ベクレルという汚染を超えているところです。

でもそれだけでは済まなかったということは、この地図が示しています。福島県の中央部、南北に青い帯が縦断しています。ここは「中通り」と私たちが呼んでいる地域で、福島県内の大きな町の多くがあります。北から伊達市、福島市、二本松市、郡山市、須賀川市、白河市というように、たくさんの方が住んでいたところを放射能の雲が舐めるように汚染をしていきました。東側には阿武隈山地という山並みがあり、西側には青森から始まった奥羽山脈という長大な山脈があって両側を山で挟まれている。その山の間を放射能の雲が汚染していった。その先には栃木県があり群馬県があり、群馬県の北半分が汚染しているということになりました。ある時は北風が吹いて放射能は南へ流れて、福島県のいわき市を中心としたあたりも汚染しました。放射能からすれば、県境などというものは、なんの意味もないわけです。

から、楽々と県境を越えて茨城県の北部を汚染した。一時期、雲が太平洋に抜けたようなんですが、また陸地に戻ってきて、茨城県の南部、霞ヶ浦あたりを汚染し、千葉県北部を汚染し、東京の下町と言われるようなところを汚染することになりました。

群馬県の西部に、くすんだ緑色を塗ったところがあります。ここはどれほど汚れたかという、1平方メートルあたり3万ベクレルから6万ベクレル汚れた場所だと日本国政府がこの地図で示している。みなさん、こんな数字を聞いても全然ピンとこないと思いますので、一つ比較の例を聞いていただこうと思います。

私は2015年3月の末まで京都大学原子炉実験所というところで、原子炉を動かしていろんな放射能を作って研究するという特殊な仕事に従事していました。もうとっくに定年退職して、そんな仕事は今はいしていませんけれども、もしその仕事を今いるこの会場でしていいかと言えば、もちろんだめです。放射能は危険なものだから普通の人が近づけるような場所で放射能を使って仕事をしてはいけない、と日本の法令が厳しく定めているわけです。私は、仕事柄しょうがないからその放射線管理区域に入って、ずっと仕事をしてきました。皆さんは入れない場所。私のような特殊な人間だけが入れる。その場所に入った途端、私は水を飲むことを禁じられます。食べ物を食べることもダメです。もちろん寝てはいけません。管理区域の中にはトイレ也没有。つまり人間が生きるなんてことは論外だ、そういうところが放射線管理区域なんです。

大変気持ちの悪い場所なので、私は仕事が終わったらさっさと出たいといつも思っていました。管理区域の出口にはドアがあって、必ず閉まっている。なぜかという、私が管理区域の中で仕事をしたということは、私の手が汚れたかもしれないということです、放射能で。私の実験着だって足だって汚れたかもしれない。そのまま管理区域の外に出れば、普通の方々が住んでいて、その人たちを被曝させてしまうことになるからです。もし管理区域か

ら出たいなら、出口にある放射線測定器で手が汚れていないか、足が汚れていないか、衣服が汚れていないかを、きちっと測定してからでないとドアは開かない、そういう仕組みになっていたんです。では一体どれだけの数値ならドアが開いてくれるのかというと、1平方メートルあたり4万ベクレル、つまり1平方メートル当たり4万ベクレルを超えて汚れているようなものは一切、放射線管理区域の外側に出してはいけないというのが日本の法律でした。ソ連の法律も同じですけども、このくすんだ緑は3万ベクレルから6万ベクレル。放射線管理区域にしなければいけない、つまり人々を住まわせてはいけないというぐらいに、放射能で汚れてしまったということなわけです。でも日本という国は、原子力緊急事態なんだ、仕方がないからみんなそこに住めと、人々を汚染地に棄ててしまうということをした。

この汚染の主成分はセシウム137という放射性物質ですけども、そのセシウム137が半分に減るまで30年かかります。事故からまだ15年しかたっていないので7割はまだ汚染が残っているという状態です。100年経つと10分の1まで減ってくれますけども、でも10分の1まで減ったところで、この赤、黄、緑のようなところは、まだまだ日本の法令で放射線管理区域に指定しなければいけないほど汚れている。

今日この会場に参加して下さった皆さんはご存じかもしれませんが、事故当時発令された「原子力緊急事態宣言」どうなっていると思われます？ まだ続いているんですよ。緊急事態って何なんですか？ 1日あった、1週間あった、ひと月続いてしまったというくらいならまだ緊急ということもあり得るだろうけれども、15年たっても緊急事態。法律は守らないし、人々を被曝させるようなことをやっているということなんです。おまけに付け加えると、セシウム137は10分の1になるまでに100年です。それでもまだ放射線管理区域の基準を超えている。つまり日本というこの国は、100年たっても原子力緊急事態宣言を続けなければいけないというほどのものすごい汚染を受けて、それが今でも続いているとい



うことです。東京はそれまで福島原発の電気を受けて、のうのと過ごしていました。みなさんの多くも東京にお住まいかもしれませんが、かろうじて猛烈な汚染を受けずに済んだということです。

事故で放射性物質が放出されて汚染を生じたわけですが、放射線のエネルギーというのは、自然界のエネルギー、生き物を含めた自然界の反応エネルギーとは全く違うんです。人間を含めたすべての生き物、すべての物質は、DNAを含め原子同士が結合して分子になることで成り立っています。水もそうだし、タンパク質もだし、すべてのものがそうです。そういうとき、原子が結合して分子になるときの結合エネルギーはどのくらいかというと、「数エレクトロンボルト（数 eV）」と言います。非常に特殊な単位で、一つの電子を1ボルトの電位差に逆らって持ち上げるのに必要なエネルギー、というのがエレクトロンボルトの定義ですが、分子結合に必要なエネルギーは数エレクトロンボルトで表される程度のもんです。

では放射線のエネルギーというのはどんなか。みなさんは病院などに行ってX線撮影を受けることがあると思いますけれども、そのX線のエネルギーは10万エレクトロンボルトです。便利なので、お医者さんはすぐ使います。胸部X線撮影をすれば、あいつ骨が折れてるぞとか、あいつ結核だぞ、がんなんだと、みんな見えてしまうわけで、お医者さんは年がら年

中X線を使いたがる。でもそんなことをすれば、私の体を貫いたX線が、私の体の中のDNAを含めた分子結合を簡単に引き裂いていってしまう、そういうことになるわけです。分子結合のエネルギーから比べれば数万倍も。先ほどのセシウム137という放射性物質はガンマ線という放射線を出しますが、それは66万1000エレクトロンボルト。分子結合のエネルギーと比べれば、なんと数十万倍も高いということになる。

福島原発からは、放射能汚染水というものが毎日のように垂れ流されているわけですが、その中にはトリチウムという名前の放射性物質が入っています。国や東電は、そのトリチウムはベータ線という放射線を出すけれども、エネルギーが低いから大丈夫と安全であるかのような説明をしています。しかしそのトリチウムのベータ線のエネルギーは、1万8600エレクトロンボルトで、これすらが私たちの体を支えているエネルギーから比べれば数千から数万倍という程のエネルギーの塊なんです。そんな放射線に被曝してしまえば体が傷つけられてしまうわけで、安全だなんて説明は全く成り立たない。

そして放射線の危険というのは大変深刻なんです。放射線があるということを人間が知ったのは、1896年にドイツのレントゲンという学者が偶然X線を見つけた時です。そのレントゲン自身もなんだか分からないというか、不思議な光があるということで「X線」という名前を付けた。その後、大変優秀な学者たちが、X線の正体を突き止めようと研究を始めました。でも彼らにしても、X線がなんだか知らない、何とか知りたいといって研究を始めたわけですが、どれだけ危険だかも知らない。みなさんキュリー夫妻をご存じかもしれませんが。マリーとピエールという2人ですが、こんな頭のいい人たちがいるんだと思うほど頭のいい人たちでした。でも2人共この研究に携わって、ピエールは体がぼろぼろになって、ある日ふらふらと道路に倒れるようになって馬車にはねられて死んでしまいます。マリーは白血病にかかって、病院のベッドに寝ながら、毎日

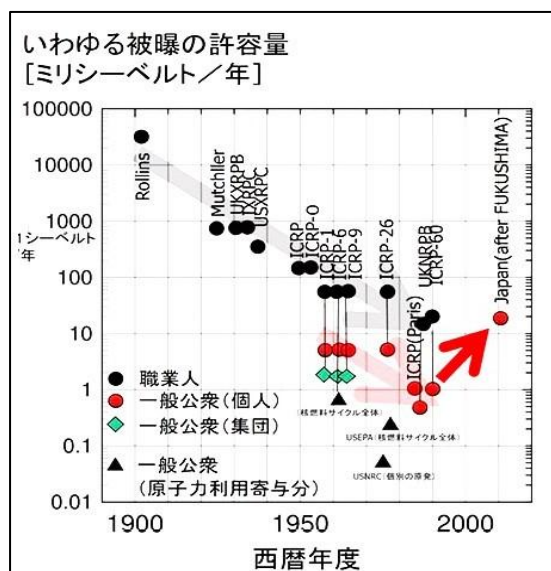
## 放射線のエネルギーは自然界の反応エネルギーと全く異なる

人間を含めたすべての生き物、そしてすべての物質は、DNAを含め原子同士が結合し、分子になることで成り立っている。

| その分子結合のエネルギー | 数 eV               |
|--------------|--------------------|
| X線のエネルギー     | ~100,000 eV<br>数万倍 |
| セシウム137のガンマ線 | 661,000 eV<br>数十万倍 |
| トリチウムのベータ線   | 18,600 eV          |

国や東電はエネルギーが低いというが、それでも数千から数万倍

自分の体温を測るのが唯一の楽しみという生活を送った末に死んでしまうということになりました。



上の図はいわゆる被曝の許容量を図にしたものです。レントゲンがX線を発見した1886年あたりから、今日までの西暦の年度が横軸に書いてあり、縦軸には1段上がるごとに10倍ずつ数字が上がっていくという、私たちが「対数方眼紙」と呼んでいる特殊なグラフ用紙に書いてあります。

1000と縦軸に書いてあるのが1年あたり1000ミリシーベルト。つまり1年間に1シーベルトまで浴びていいという数字ですが、なんと10シーベルト以上浴びてもいいよという、1900年頃はそういう基準だった。こんなことをしたらもちろん人は死んでしまいます。人間が8シーベルトも浴びれば、それだけで死んでしまうということが現代では分かっているわけで、猛烈な被曝量だった。その危険を知らないまま、こういうところで仕事をして、次々と死んでいくという時代だった。

でも研究がどんどん進むにしたがって許容量は劇的に下がっていきます。そして原爆が広島・長崎に落とされた後に、放射線は危険だから、職業人だけでなく一般の人たちの被曝も制限しなければいけないというような時代が始まりました。その後も研究が進めば進むだけ放射線は危険だということが

次々と分かってきて、許容量は、職業人も一方的に下がってきたし、一般の人たちも下がってきた。科学的な知識が増えれば増えるだけ、放射線というのは危険だ、被曝はきちっと制限しなければいけないということが分かってきて、1980年頃には、一般の人は1年間に1ミリシーベルト、職業人は1年間に20ミリシーベルト以上の被曝をさせるな、というのが国際的な合意だったし、日本でもソ連でもそういう法律ができた、そういう時代でした。

でも日本は福島事故が起きてどうしたかというと、なんと一般の人々も職業人に許した20ミリシーベルトという値をみんな我慢しろ、というようなことを決めたんです。

これは柚木ミサトさんというイラストレーターが書いてくれたイラストで、私たちは「赤いつぶつぶのイラスト」と呼んでいます、この赤いつぶつぶが放射能を意味しているというものです。



地図を作って、福島を中心に広大な地域が放射線管理地域にしなければいけないほど汚れていると言ったのは日本の政府です。風評で汚れているのではないんです。国が地図を作って示したように、実際に汚れているんです。本当だったら、そんなところに普通の人は入ってはいけないし、私が入っても水を飲んではいけないという汚染地帯なんです。そこに子どもたちを棄ててしまったということです。

福島事故を起こした最大の犯罪者は、国だと私は思っています。もちろん東電には重大な責任があるけど、その東電に原発を許可したというか、むしろ

ろ引きずり込んで使わせたのは国です。なんとその犯罪者は、事故が起きたら勝手に被曝の制限を変えてしまい、子どもを含めた人々が被曝し続けているわけです。

汚染しているということに気がつけば、もちろん何がしのことはできるだろうけど、汚染しているということが分からない。放射能というのは五感に感じないからです。人々は四六時中恐怖を感じながら生きることはできませんし、できれば忘れてしまいたいと思っているわけで、国のほうは積極的に「忘れろ」と言ってしまうている。福島を中心にほとんどの人たちはこういう状態で 15 年間暮らしてきて、これからも強制させられそうだという状態になっているわけです。フクシマ事故の最大の犯罪者である国はそこにすべて棄ててしまいました、人々を。そうした汚染地に残れば、被曝します。被曝すれば必ず実害が伴います。つまり福島を中心に汚染地で生きている人たちは、必ず体が傷ついていっている、四六時中次々に傷つく状態にあるわけです。そんなのはいやだと、何とかしてこの状態から逃げたいと、逃げた人たちがたくさんいます。家族全体で逃げた人たちは、生業を失って生活が崩壊してしまいます。男親が残って、母親と子どもを逃がした家庭がありますが、そうすると今度は家庭が崩壊してしまう。離婚なども相次いで起きるといふそんな状態になってしまう。

つまり、子どもを守ろうとして汚染地から逃げれば、生業を失ったり、家族がバラバラになって心が潰れてしまうという、そういう深刻な被害を受けたわけです。どっちがよいのかと考えても選択ができないというくらいの深刻な選択を迫られて、逃げた人もいれば汚染地に残って生活している人もいます。でも、彼らの間で今度は分断されてしまって、住民同士が敵対して、「逃げる奴は悪い奴だ」と言う人もいますし、汚染地に残っているのは子どものこと考えていない人たちだという考えもあるわけです。どっちも被害者なのに、被害者同士が国によって分断

させられてしまって、敵対させられる。そんな状況が続いています。

「原子力緊急事態宣言」が発令されてから 15 年経ちました。でも先ほど聞いていただいたように、いまだに解除できません。国は何と言っているかというと、電力需要がひっ迫しているから、これからどんどん原発やるというようなことを言って、多くの国民がそれに騙されている。でも日本で電力需要が逼迫したなんてことは全くありません。フクシマ事故が起きた直後、東京電力管内だけで計画停電というのが、ごく短期間行われましたけど、他は別に何もなかったわけだし、ごく短い計画停電のあと、それ以降今日に至るまで何も問題ないというぐらいです。それなのに国は、第 7 次エネルギー基本計画というのを去年（2025 年）の 2 月に決めて、それまでは曲りなりにも「可能な限り原発依存を低減する」という原則だったんですけど、それも転換してしまって「原子力を最大限活用する」といふようなことを今、言い出しているわけです。冗談ではない。原発ほど危険で不安定な電源なんてものはないし、日本には水力発電所・火力発電所が山ほどあって、それで十分電力は足りる、そういう状況になっています。フクシマ事故の時もそうだったし、それ以降、再生可能エネルギーの発電所がどんどん増えているし、電力需要はどんどん減っているんです。

AI でこれから増えるんだといふようなことを言う人たちもいますけれど、そんなものどんなに増えたとしても知れています。日本であり余っている発電所の能力に比べれば、AI が使うレベルなんていうのは知れている。もちろん、膨大な電力を使う技術は使ってはいけなく、とすべきなんですけれども、AI で困ることなんか全くない、そういう状態です。その上、ピーク電力の時は困る、電気は貯めておくことはできないから、沢山使う時に合わせた発電所を用意しておかなければいけないといふようなことを国は言っているわけですけど、日本には原発の余剰電力を使うために一余った電力を使ったり、足りない時に発電したりーというために作った揚水式水力

発電所というのが2747万キロワット、100万キロワットの原発に換算すれば約30基分もある。本当にピークで困る時にそれを使えばいいのであって、日本に原発なんか全く必要ない、そういう状態が現在です。

それなのに何故、この日本という国では原発が進められようとしているかということ、まずは政治の問題です。初めに「核発電所」という言葉を使うと私は言いましたが、政治の場では「原子力」を平和利用すると嘘をついて、本当のところは核兵器保有能力をつけたいんだということです。それはずっと戦後一貫して、そういう政策が続いているんです。政治の世界で一番の興味は核兵器なんです。では、財界はどうかというと、原発を作ることで大儲けし、福島事故が起きたら、今度は「除染」と称してぼろ儲けをしました。今何をやっているかということ、「復興」と称してまた大儲けをしている。福島県の浜通り、いわきを中心としたところに、原子力産業と軍需産業ですけど、大型箱物施設を林立させて、そこに日本の国は国庫から膨大な金を流して、企業の方はぼろ儲けをする。そして原発事故を起こした企業、原子力産業、東京電力、誰一人として責任を取らないし、会社も潰れない。どんなことがあっても大儲けできる、そういう状態になってしまっている。そしてそれを支えているのが官僚で、経産省を中心に原子力を進めてきました。

フクシマ事故で、「原発は安全だ」なんて神話は崩れてしまったし、高速増殖炉の原型炉でしかなかった「もんじゅ」は廃炉になって、核燃料サイクルも破綻してしまいました。核燃料サイクルができれば、原子力はエネルギー源にならないということ、私たち専門家の常識です。プルトニウムという物質を使えるようにならないと、原子力はエネルギー源にならないというのは常識で、つまりもう原子力はエネルギー源にならないということは分かっているんですけども、それでも経産省はあきらめない。今は、「被曝安全神話」というものを振りまいている。今、原子力を止めてしまったら、あちこちに矛盾が出てしまうんですね。政策を継続しなけ

ればいけないということを言いながら、いつまでも原子力を続けようとしています。

大切なのは何なのかと言えば、一人一人の幸せで、国ではありません。一人一人が、どうやったら幸せに生きられるかということが大切です。チェルノブイリ事故のとき、ソ連は人々を汚染地に棄てました。フクシマ事故のとき、日本は人々を汚染地に棄てました。ソ連が崩壊の後、ウクライナ、ロシア、ベラルーシと3つの国に分かれたわけですけども、事故から5年たって1991年に「チェルノブイリ法」という法律を制定して、人々の被曝基準を元に戻しました。汚染地に放置してしまった人たちも守らなければいけない、1年間に1ミリシーベルト以上の被曝をさせるなんてことは間違っている、と法律を変えて、本来の法令に戻した。ようやくにしてその決断をしました。

でも日本というこの国、15年経った今でも「緊急事態」だからと言いながら、人々に被曝を強制しています。そして、一方では「緊急事態宣言」が続いていることを隠してしまっています。マスコミはもう全く何も言わないし、国はどんどん安全神話をばらまいて、フクシマ事故がなかったことにしようとうと、そういう策動を続けているわけです。

聞いていただいたように、本当に必要なことは、一人一人の人間の幸せだと私は思います。しかし、日本の国は一人一人のよりも、国自身を大切にしようとしている。そんな国、私は許したくないので、闘わなければいけないと思っています。みなさんのお力を貸していただければありがたいと思います。ありがとうございました。

(以上、当日の講演から一部省略してまとめました。)

#### 小出裕章 (こいで ひろあき)

元京都大学原子炉実験所助教。1970年以降、原発をやめさせるために原子力の研究を続けてきた。松本市に移住した今も、各地で講演を続ける。



## 菅谷昭 講演 「ベラルーシでの甲状腺がん治療の経験から福島を考える」



私はチェルノブイリ原発事故で一番被害を受けたベラルーシという国で仕事をしてきました。首都のミンスクに3年半いました。その後は次第に、高度汚染地に行きまして、ゴメリ市に1年いて、最後は原発から90kmのところにある町で

検診をして、5年半過ごして戻ってきました。

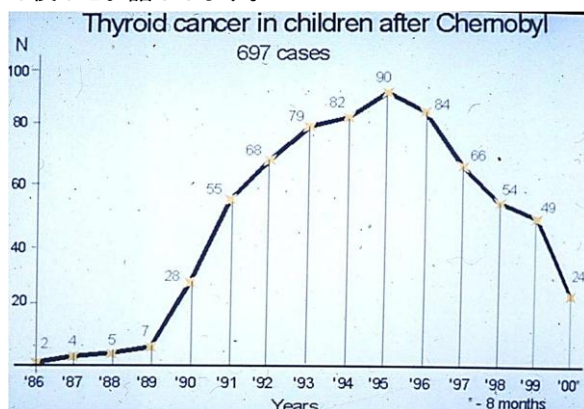
### 【ミンスク市・国立甲状腺ガンセンター】

1996年にベラルーシに行きましたが、その5年前から現地の汚染地の村で検診をしていました。その時初めて、ミンスクの国立甲状腺ガンセンターを訪ねましたところ、総長さんが「ちょっと待ってくれ」と言って連れてきたのがこの子たちです（写真下）。私は長年甲状腺に携わってまいりましたが、子どもたちがぞろぞろと、びっくりしました。25年以上甲状腺ガンに携わってきましたけれども、手術もほとんどしたことがなかったわけです。ああそうか、やっぱり子どもたちはガンの手術を受けている——首のところに傷がありますけど隠しています。こんな状況でしたから驚きました。チェルノブイリの原発事故によって子どもたちの甲状腺ガンが増えているのが分かるわけです。

次に子どもの甲状腺ガンの推移ですが、X（横）軸が西暦、左端が1986年でチェルノブイリ事故があっ



た時です。Y（縦）軸が症例数ですが、折れ線グラフで見ると（下、「小児甲状腺癌の推移」）、最初の4年ぐらいいまでは少ないですね。4～5年経つと急に上がるわけです。当時私も向こうにいた時には、彼らの話ではこれが潜伏期でこの後で増えると。私もそう思いました。私がベラルーシに行ったのが96年の1月ですが、ここがピークになります。大体事故から10年です。そこからまた減っているのですが、見てもらって分かるように、最初の4、5年というのはほとんどガンが少ない。なぜだか分かりません。それが潜伏期という形で、福島は1年も経たないうちから増えたので、「福島のガンは放射線の影響じゃないよ」と言われた。そうか、そういうことならどうやってこれを打ち破ろうかなと考えたのですが、それは後ほどお話しします。



### 【傷跡が残らないように手術をする】

この甲状腺ガンセンターは、事故が起きた後に国が作った病院です。しかも甲状腺に絞ったガンセンターで、子どもたちはここで全部手術するということになりましたが、まあ、その傷たるやすごい傷なのです。子どもたちは理不尽な形でガンになるわけですから、その子どもたちは手術を受ける時どんなにか怖い気持ちであったかと。特に女性の場合は、やはり首の傷というのは気になる。見えるところですから、できるだけ傷跡が残らないように手術をする、ということが我々は鉄則だったのですが、それが違ったので、えらいことだなあと思いました。現



地のドクターたちの背中を押してあげるつもりでいて、自分が手術するなんてさらさら思っていなかったのですが、総長さんが「やってくれないか」というので、ドクターを指導するような立場で時々手術をさせてもらったという形です（写真上：1996年2月14日）。

私は退職金で行ったものですから、退職金が尽きてしまい、5年半で日本に戻ってきました。ベラルーシに5年半いたなかで、最初感じたあの子どもたちの状況、あるいは家族の状況を見たとき、最終的にチェルノブイリの子どもたちの苦痛は何か。それを考えると、やはりチェルノブイリの事故による被災地ですね、生活する子どもたちの苦痛というのは、言い換えれば原子力災害による、まさに子どもたちの生きる権利、生存権、これを侵害している。そしてこれに肉体的及び精神的な痛みと苦しみに伴い、さらに換言すれば本当に子どもたちへの虐待です。

しかし家族で汚染地に住まざるを得ない。その後、移住したとしても、まだ日本のように汚染の少ないところならいいのですが、そうでないところに住んで、ずっと低線量被ばくが継続している。その低線量被ばくで何が起こるかということは、後ほどお話しします。こういう状況を何とかしないといけないと思い、日本に帰ってまいりました。

### 【私の発した三つの提言】

原発事故による汚染地での5年半にわたる医療支援の経験を通して2001年に帰ってきました。その後いろんな機会を通して、三つの提言を発し続けてきました。今後、新たな原発建設は禁止してください、

作らないでほしいと。それは一つには日本は当時50基ぐらいあったと思いますが、原発大国で、こんな小さい国でなおかつ地震大国で、日本は特殊なプレートの上に載っていますから、事故があったらえらいことになっちゃう。同時に現在稼働中の原発の安全性が大事。やっぱり安全に作ってください。

二つ目が、とにかく国の政策としてエネルギー政策はもう原子力から、核から、再生可能エネルギーに移ってくれ。政策転換ですね。原発関連のお金を相当使っているわけですから、それを再エネの開発とか研究等に向けてシフトしてくださいよ。日本には優秀な方が多いですから、そういう方が今度は新しい再生可能エネルギーのいろんなものを考えてくれる。今、風力、あるいは太陽光発電とかいろいろあります。しかしもっとすごいことを考えてくるかもしれない。

それから三つ目は、国民各自が国にばかりいろいろ文句言ってるだけではだめです。私たち自身もやはり生活様式を見直す努力をしなければいけない。それは特に節電意識の強化があります。そういう意味で言ったら日本は、やろうじゃないかってなうまくやれば、先ほどの小出さんのお話にもありましたが、電気が足りない、足りないってことはないのではないか。一番の問題は、安全神話に騙されたことですね。だから日本はあれだけどんどん原発作ったけれど、私も「いつか起こるよ」って言っていたら、案の定福島が——しかもレベル7ですからね。チェルノブイリと同じような尺度の、原発としては最悪の事故を起こしてしまったのです。

帰国後、私は2004年に松本市の市長になりまして、16年ほど、4期やっていました。それでこの方面になかなか、顔を出せなくなりましてほとんど静かにしていました。そういう中でも、ミンスクでお会いしたこともありました小出さんが松本に移住してくれたことは嬉しいことでした。そして2016年に市民の皆さんの了解を得まして、チェルノブイリの事故から30年経過した節目の年に、どうなっているのかと、現地を訪問しました。

## 【ゴメリ州ベトカ地区〈居住禁止区域〉】

ベラルーシには6つの州がありますが、一番高度に汚染されているのはゴメリ州です。居住禁止区域があり、30年進入禁止、入ってはいけません。要するにまだ人が住めない。立ち入り禁止なので、許可をもらって入ってきました。



道路沿いの草木は手入れされずに伸び放題です。道路脇で30年経ったらどうなのかと空間線量を測ると、0.4マイクロSv（シーベルト）/時です。東京を出る時0.06～0.07マイクロSv/時ですから、30年経過しても、東京の7倍くらいですね。それは当たり前なわけです、セシウムの半減期が30年ですから、まだ半分しか減っていない計算になります。畑に入れば、またぐーんと上がる。ですから、「除染した、除染した」と言っても、し切れません。ウクライナ、ベラルーシは穀倉地帯ですから、本当に豊かな土地が全部汚染されている状況というのがよくわかりました。30年経っても結局は高線量の状況は変わっていませんでした。

## 【ベトカ地区病院・子どもたちを救う会】

ベラルーシの子どもたちを救う会をボランティアでやっている皆さんとお会いしました。ベトカ地区病院の男性の院長さんと会の代表で小児科の女性ドクター。院長さんは、「ベラルーシでは汚染地の子どもたちに毎年1か月程度の健康のための保養を、すべて国の責任で、無料で実施している」と話してくれました。これは当たり前のことですが、国が責任をとらないといけません。彼らは、日本の国はダメだって知っていて、なぜ国家的プロジェクトを

実施していないのかと不思議がって、「私たちの国は貧しいけれど、子どもたちのために無料で保養をやっています」と言う。また、小児科医の女性は、「市民一人ひとりが放射能の影響や健康を守るための手段について、より深く学ばなければいけない」と。

その時私は、「チェルノブイリ原発事故後、小児甲状腺ガンでは4、5年は上がっていないけど、それが急に上がった（P.9の折れ線グラフ）。本格的な検査は一体いつから始まったのか」と聞いたんです。そうしたら「あなたが（1991年に）超音波の機械を我々にくれたじゃないですか！」と。だから5年後から増えてきた。一方、福島は1年目からもっとすごい解像力の良い機械を使って検査しているから、どんどん見つかった。それであえて尋ねてみました。「では、もし当時ベラルーシに今の福島のような良い機械があったら早く見つかったでしょうね？」と。「おそらく早く見つかったでしょう」と彼は言っていました。

## 【ゴメリ州立保健局】

ゴメリ州立保健局の内科医の保健局長さんと、ゴメリ周辺の子どもを含めて、健康の状況について意見交換しました。話の終わりに局長さんは、「国家は人々に対して背を向けてはいけません」ときっぱり言いました。果たして日本はどうでしょうか。やはり残念ですが、日本は国がもう少し本気で、事故が起これば国がそれなりの支援をすべきではないかと思いました。この局長さんにも先の同じ質問をしました。日本で今使っているような超音波の機械を当時のベラルーシで使ったらどうだったかと。すると、うーっ、と詰まって、「人の国のことは言えないのだけど、正直言って性能の良い機械で検査していたらベラルーシも早い時期から見つかっただろう」と答えました。ですから、そういうことを考慮しないといけません。5年後に甲状腺がんが出たチェルノブイリと福島は違うと言われますが、それには科学的根拠がないと思ったわけです。

チェルノブイリ事故後の小児の健康被害について



も聞きました。ある意味では、少し低濃度の汚染地域における研究です。本当に今も起っているわけです。事故から30年目の時ですが、免疫機能低下—チェルノブイリエイズという免疫力の低下、それから貧血—造血器障害、骨髓がやられるわけです。それから周産期異常ということで未熟児、早産、死産、先天性異常ですね。また、子どもたちは非常に疲れやすいとか集中力欠如、体力低下が目立つ。もう一つがセシウムの体内蓄積。食べ物を通して体に入るの、排泄されないと残ってしまう。ここに保養をする意味があるわけです。保養に行ってきたものを食べて、元気をつけて、お通じをちゃんと出してっていうような感じで、こういうのを防いでいかないといけない。

ベラルーシというのは、ロシアとウクライナの戦争によって、今ベラルーシはロシア側ですので、なかなか日本と連絡を取れない状況にあります。空間線量が依然として高く、先が見通せない状況にあるし、高齢者の場合はいろいろな病気が増えていて、近年はストロンチウムの影響。これは骨に行く、カルシウムと同じです。動植物の育成における生態系も染色体異常とか奇形が出ています。これは人間にも起こります。

### 福島現状と今後の課題

- (1) 福島の事故はチェルノブイリと同じレベル7の、原発史上、最悪の事故である。国や県においては、子どもたちの甲状腺がんを含めた広範な定期的検査等に、より一層力を注ぐべきである。併せて、長期的・持続的低線量被曝による影響について慎重に対応するため、非がん性疾患や周産期異常などの健康障害発生に対しても関連諸検査を継続し、その結果の公表が不可欠である。
- (2) 現在、東京地裁において「311子ども甲状腺がん裁判」の口頭弁論が進行中であり、原告らに対する早期の適正な評価を願うところである。本裁判の結果は、原発事故関連の多方面における訴訟に対して多大なる影響を及ぼすものと推測される。
- (3) 福島の事故後、国は原発依存政策から脱却しようとする姿勢も見られたが、近年は再び原発回帰への方針転換が強まり、休止原発の再稼働に向けての推進など、放射能災害の実状を軽視する潮流に強い危機感を覚える。改めて、わが国は「産業・経済」を優先するのか、あるいは「命」を優先するのか、私たちはその岐路にあることを深く認識しなければならない。

### 【福島県のある高校生より】

ある会で福島県内の高校1年生たちが「学校ではほとんど原発事故のことを教えられてこなかった」と言ったそうです。これは極めて異常です。あえて教えないのでしょうか。まさか昔の言論統制のごとき制約がなされているのではないかと。現実に関心することが起こったらえらいことですね。

「放射能が目に見えればいいのにな…」という柚木ミサトさんのイラストです。小出さんが先ほど紹介されたイラストは(p.6)は、小鳥にきれいな餌をやっていましたね。



「日本人の大人には原子力の暴走を許し、福島第一原子力発電所事故を引き起こした責任がある」と書いてあります。ここにいる皆さんも同じなんですよ、暴走を許した。「福島第一原子力発電所事故を引き起こした責任がある。自分が被ばくしても、子どもたちを被ばくから守るのが大人の責任」。そうです、我々は被ばくしても子どもは守ってやらないと。さらにもっと関心を持ってもらわないと大変なことが起こるとするのは、ずっと小出さんが警鐘を鳴らしています。私もこれからずっと見ていきます。何とかしなければいけないという思いです。

(以上、当日の講演から一部省略してまとめました。)

### 菅谷 昭(すげのや あきら)

信州大学医学部を退職し、1996年から5年半、ボランティアでベラルーシに住む甲状腺ガンの子どもたちを治療。帰国後、松本市長4期、その後松本大学学長、2024年退任。

★柳原さん、佐々木の講演、第二部パネルディスカッションの様子は次号(2026年10月発行)に掲載します。

## チェルノブイリの歌声

～5/23 講演会参加者のみなさまから～

◆原発過酷事故による放射線被ばく被害は大変深刻なもので、一人で立ち向かおうすると体力も気持ちも大変ですが、本講演とパネルディスカッション、会場をご提供くださった明治学院大学から力を頂きました。保養という被ばく被害を軽減する方法や生きていく糧になる方法を示してくださった事、あべこべを分類して解説して整理してくださった事、腐った政・財・官・日本に怒りをぶつけてくださった事、トップダウンではなく現場が声をあげていく事を再確認できた事、一人一人が努力していく事など、元氣も頂けたからだと思います。貴重なご機会を頂きどうもありがとうございました。これからも共に頑張ります。(40代)

◆非常に有意義でした。自分の周囲の人達にどうしたら意識を高められるのかと思います。パネルディスカッションもとても良かったです。またこのような企画をして頂きたいです。満席の中、椅子を増して下さって感謝しています。たくさんの方が集われたのも良かったです。学生にもっと参加して欲しいですね。(70代)

◆今まで原発については断片的な場で聞いていましたが、今日は多面的にお話を伺えて良かったです。今後とも企画をしてください。(70代)

◆チェルノブイリと福島事故に対する国の責任の向き合い方の違いが鮮明にわかる4氏のお話だった。一人一人の命よりも国が大事というのであれば、まさに戦前に逆戻りするような話である。国策だから仕方ない、国の言うことに間違いはない(安全神話)、ということがまかり通る国は、もはや主権在民国家とは言えない。一人一人の生き方が問われていると、お話をきいて改めて感じた。第二部は大変内容の濃いパネルディスカッションだった。“民主主義ってなんだ?”という問いを改めて突きつけられた思いだ。(50代)

◆「原発事故」という言葉に隠された多くの問題に気づくと共に、チェルノブイリを契機に活動してきた人々の経験、知識をいかに日本で活かすか、バッシング等に抗していくかが重要だと感じた。国家の取り組みに対する疑念は常に持つべきだろうし、その不信感や誤りを明確に声にしていく必要があると

感じた。同時に、他人事としての「原発事故」という意識を変え、自分達で活動すること、抗していくことが求められるし、そうした人へのバッシングに加担するのではなく、支えていく勇気が重要だと思った。(20代)

◆チェルノブイリでの被害やそこから得られた教訓が十分にいかしきれていない現状にもどかしさを感じる。人の命と暮らしを大切に社会・政治を実現するために、今回の問題をどのように伝えていくのか。重要な提起だったように感じた。(20代)

◆ベラルーシでさえ子ども達のケアをしているのに、日本はなぜ国が白を切ったのか。その理由が本当にわからない。そこに日本のあらゆる問題の根本があるのだと思う。4名とともに共感できる意志の方々ですばらしいと思った。(60代)

◆厳しい現実を判り易く説明を頂き、感謝。忘れかけてきた状況を再認識し、現地のことを知ることができた貴重な機会となった。(80代)

◆第一部はそれぞれに素晴らしいお話とご報告でした。いつも基金のニュースレターで拝読していた佐々木さんのお話を直接伺うことができたのも幸いでした。第二部は時間が短いのが唯一残念でしたが、お話そのものは第一部同様感動的で、脱原発・脱被ばくの思いを新たにしました。(60代)

◆今まででもお話を聞いていたのに、ここ数年、原発問題を我が事として考えていなかったことを反省する機会になりました。4名の方のお話は貴重でした。(70代)

◆全て興味深い内容であった。これからもよく考え、何かの形で行動をしていきたい。国の責任＝国民一人一人の責任ということを、心に重く受けとめました。(60代)

◆時間が短くて残念でしたが、皆さん国の責任を問うと力強く仰っていて力づけられました。(50代)

◆大変丁寧でわかりやすいお話でした。もっと若い方にも来ていただけたらと思います。ひとつひとつ心に残るお話でした。(70代)

他にも多くの皆様から意見、ご感想をいただきました。ありがとうございました。



## ウクライナからの便り

子ども基金では、ウクライナ側パートナーの NGO 「チェルノブイリの子どもたちの生存」代表ザクレフスキーさんと頻繁に連絡を取り合い、子どもたちの夏の保養に向けて準備を進めています。その合間に日常の様子についても折に触れて伝えてくれています。

\*\*\*\*\*

2026 年 4 月 30 日

チェルノブイリ事故が起きた 40 年前の 4 月はとても暖かかったことを覚えています。それに比べていまのキーウ（キエフ）はかなり寒いです。それでもあちらこちらでサクラが咲いています（写真上 2 枚）。4 月 26 日、ヴォロディーミル大聖堂での礼拝の後、私が撮影したサクラです。ウクライナで一番サクラがたくさん咲いているのは西部にあるウジゴロドという町です。28 日、「サクラ」と名付けられたキーウ～ウジゴロド間を走る列車の運行が始まりました。これは在ウクライナ日本大使館と国際協力機構（JICA）の支援によるものです。

2026 年 5 月 27 日

土曜日の夕方（5/23）から日曜日（5/24）の朝にかけて、キーウはミサイルやドローンによる激しい攻撃を受けました。主に町の中心部が被害を受けました。「国立チェルノブイリ博物館」と周辺の建物の被害は深刻なものです。博物館の展示品の 40% が破壊されました（写真下・左：破壊されたものが外に運び出され、路上に積まれている。復旧作業が行われている様子）。



キーウの独立広場にある郵便局の入口や多くの窓のガラスが爆風によって割れていました（写真下・中央：立ち入り禁止のロープが張られている）。それらは一時的に合板で補修されています。現在「チェルノブイリ・シェルター」展が開催されている国立文化センター「ウクライナ・ハウス」も同様の状況です。最も大きな被害を受けたのはルキャニウスカ駅周辺の地区です。そこでは大型ショッピングセンター、屋内市場、そして近隣の建物数棟が完全に破壊され、人的被害も出ています。キーウの独立広場や私たちのオフィスから少し西側にある場所です。

私たちのオフィスがある地区は、全く被害を受けませんでした（写真下・右：2 階のバルコニーにウクライナ国旗が掲げてある。オフィスはこの建物の 1 階）。

\*\*\*\*\*

戦争前、事務局スタッフが「生存」のオフィスを訪れたときは、この建物の前の壁や階段に土産物用の絵が何枚も飾られていました。通りの両側に土産物のテントが立ち並ぶとても賑やかなところでした。



## 【ナロジチ・リツェイ】

### ジトーミル州ナロジチ

前号（2026 年 2 月発行 No. 133）でお知らせしましたが、ナロジチの学校でチェルノブイリ事故 40 年の行事が行われました。当日の様子が写真とともに送られてきました。

（「リツェイ」は、特に専門分野の科目に重点を置いて履修するタイプの義務教育課程の学校です。）

\*\*\*\*\*

この日は、犠牲者を追悼し、災害の規模を認識することを目的とした授業が行われました。教師たちが当時の出来事を話した後、生徒たちはチェルノブイリ事故の処理作業に従事した「リクビダートル」たちの勇気や、人命の尊さについて話し合いました。

<放射線防護服をして説明する先生>



図書館ではチェルノブイリ事故に関連する書籍が展示されました（写真下・左）。

生徒たちは絵やポスターなどの作品を作り、失ったものへの痛みや、安全な未来への希望を表現しました。絵の下には「チョルノービリ（チェルノブイリ）私たちの記憶の中に。過去を記憶し、未来を守る」と書かれています。



<生徒たちの作品。立ち入り禁止の標識や放射能測定器などのイラストが、絵の中の木に吊るされている。>



チェルノブイリ事故の追悼碑のある地元の公園も訪れました。事故の規模と、それが人々の運命にどのような影響を与えたかということを思い起こした一日でした。





## 里親のページ ベラルーシの子どもたち

里親支援金はこれまで、子ども基金から現地慈善団体の銀行口座へ送金し、各団体からそれぞれの家族へ渡していました。しかしベラルーシへは依然として日本から直接送金ができないため、長年協力関係にあるドイツのNGOと連携して支援を継続しています。今回、新たに4人の方が里親になってくださいました。里親支援を受けられることになったベラルーシ・ゴメリ州の町で暮らしている子どもたちを紹介します。

\* \* \* \* \*



**ティモフェイ (7 歳)**  
**ジロービン市**

遺伝性溶血性貧血、慢性溶血性クリーゼ。障がい認定を受けている。頻繁に呼吸器系の風邪、急性呼吸器ウイルス感染症にかかる。生後3年間、ティモフェイは重度の貧血のため、洗浄赤

血球3個を用いた補充療法を頻繁に受けていた。出生から現在に至るまで、予防接種を受けることを医師から禁止されており、様々な病気にかかりやすい状態。両親、6歳年上の姉と暮らしている。



**ミラーナ (13 歳)**  
**スヴェトロゴルスク市**

自己免疫性溶血性貧血。障がい認定を受けている。11歳で発病し入院、治療、輸血が行われた。7か月後に再発し入院。その後も定期検査が続いている。母親、2歳年下の妹と暮らしている。父親からの援助は全くない。母親（1989年生まれ）は生まれてから現在までスヴェトロゴルスク市（チェルノブイリ汚染地区）で暮らしている。小学2年生から神経線維腫症を患い、障がい児認定を受けた。健康上の理由で通学が困難だったため、11年生まで自宅学習をしていた。現在も治療を継続している。



**クセーニヤ (7 歳)**  
**チェテルスク市**

左腎下極の紡錘細胞肉腫。障がい認定を受けている。生後間もなく左腎臓に嚢胞があると診断され、5歳の時に病名が確定した。化学療法、放射線治療を受けた。急性呼吸器感染

症、気管支炎、中耳炎、気管支喘息も患っている。絵を描くこと、工作することが好きで、創造力が豊か。両親、5歳年上の兄と暮らしている。兄は低血糖症、乱視、気管支喘息、肺癰、筋緊張低下を伴う運動機能障がいと運動失調の症状があり、障がい認定を受けている。クセーニヤの母親（1988年生まれ）は、チェテルスク市のチェルノブイリ汚染地区で生まれ育った。



**マトヴェイ (12 歳)**  
**ジロービン市**

フォン・ヴィレブランド病（遺伝性の出血性疾患）。障がい認定を受けている。3歳頃から頻繁に鼻血が出るようになり、7歳で病名が確定した。最近の検査の結果、心臓の奇形も新たに

見つかった。スポーツを禁止されている。両親、5歳年上の兄と暮らしている。チェルノブイリ事故当時、父親はジロービン市に、母親はジロービン地区の村で暮らしていた。父方の祖父母は甲状腺がんを患っている。母方の祖母は2011年に48歳でがんにより亡くなった。



## 募金・救援状況



## ●募金状況

2026年2月～5月

(単位: 円)

|         | 2月      | 3月        | 4月        | 5月        |
|---------|---------|-----------|-----------|-----------|
| 募金件数    | 29      | 145       | 54        | 54        |
| 救援寄付金   | 349,760 | 838,242   | 1,411,200 | 428,644   |
| 保養費     | 3,000   | 96,050    | 56,500    | 31,000    |
| 里子支援    | 203,650 | 0         | 462,060   | 1,138,040 |
| ウクライナ支援 | 12,000  | 211,000   | 46,000    | 28,000    |
| ニュース購読費 | 4,000   | 74,000    | 26,000    | 12,000    |
| 合 計     | 572,410 | 1,219,292 | 2,001,760 | 1,637,684 |

\* 上記の他、切手のご寄付をいただきました。ありがとうございます。

## ♡ 団体名一覧 ♡

(順不同・敬称略)



紙面の都合上個人名は省略させていただきます。ご寄付をいただいたみなさまに心よりお礼を申し上げます。

【2月】代々木上原教会 教会学校

【3月】川保育園 父母の会、  
四日市メリノール学院高等学校  
インターアクトクラブ

【5月】リサイクルグループカリーナ

## ●救援状況

2026年2月～5月

(単位: 円)

|                               |           |
|-------------------------------|-----------|
| <ウクライナ>                       |           |
| ◎チェルノブイリの子どもたちの生存             |           |
| 子どもたちの保養費                     | 2,273,670 |
| <ベラルーシ>                       |           |
| ◎困難の中の子どもたちへ希望を               |           |
| 里子支援金 (半年分×39人)               | 1,821,718 |
| 緊急支援 (半年分×6人)                 | 166,824   |
| 団体運営費 (スタッフ給料 半年×4人、事務所家賃の一部) | 187,584   |

★ ★ ★ ★ ★ ★ ★ ★ ★ ★  
「サマシヨール 遺言 第六章」  
上映と豊田直巳監督のトーク

2026年9月12日(土)

開場 13:20 開演 13:40

終演 16:30

●会場: 町田市民フォーラム ホール  
JR 横浜線町田駅(ターミナル口)  
徒歩5分・小田急線町田駅徒歩8分

●前売券 1000円 当日券 1200円  
学生・子ども: 無料

●問合せ・申し込み先  
Tel 070-5568-3311(宮城)  
Email matimati@dream.com (新井)

●主催: 原発事故を考える町田市民の会

●協賛: 映画を観る会・まちだ  
九条の会・たまがわがくえん  
チェルノブイリ子ども基金

### 2026年版チェルノブイリ救援カレンダー 収益金 1,340,032円

収益はチェルノブイリと福島原発事故により被災した子どもたちの救援のために使わせていただきます。

★上記のうち 223,785円を「未来の福島こども基金」を通して福島原発事故により被災した子どもたちへの支援と致します。

## ★募金振込口座のご案内★

いつもあたたかいご支援をまことにありがとうございます。同封の振込用紙によるお振込のほか、以下の口座へ直接お振り込みいただけますので、ご都合のよい方法をご利用ください。※振込用紙以外でお振込の場合は、お名前、金額、ご寄付の内容のご連絡をお願いいたします。

(1)郵便振替口座 00160-4-98316 口座名 チェルノブイリ子ども基金

(2)ゆうちょ銀行口座 店番 019 店名 ○一九店(ゼロイチキョウ店)

預金種目 当座0098316 受取人名 チェルノブイリコドモキキ

(3)三菱UFJ銀行 支店名(番号):新宿中央支店(469)

口座番号:普通 1688367 口座名:チェルノブイリ子ども基金

【映画の紹介】福島原発事故から10年。人類は放射能と共存できるのか?二人のフォトジャーナリストが撮り続けたフクシマの終わることのできない物語。映画『遺言～原発さえなければ』からつづく待望の第六章。(113分)  
監督: 豊田直巳・野田雅也



# 事務局から

●未来の福島子ども基金 総会・映画上映・三味線弾き語り  
7月20日(月・祝) 開場13:45 開始14:00  
会場:柳瀬川図書館視聴覚室(東武東上線柳瀬川駅 徒歩5分)★ドキュメンタリー映画『マイプレイス 保養という選択』(監督 渡辺嶺也)上映会★せとうち交流プロジェクト代表 蝦名字摩さんのお話と三味線弾き語り★会計報告★黒部ドクターの話  
\*予約不要、どなたでも参加できます。  
主催:未来の福島子ども基金 問:090-3539-7611(向井)

●3.11 後の日本を生きるわたしたちの対話集会  
伴走者:小川晃弘 柳原敏夫  
7月12日(日)①12:00~14:00 ②14:30~16:30  
Space&Café ポレポレ座 JR 東中野駅徒歩3分  
参加費 800 円(学生無料) 各回定員 35 人  
共催:市民が育てる「チェルノブイリ法日本版」の会  
申込:Tel.090-8494-3856(岡田)  
メール:toshiko\_english@xf7.so-net.ne.jp

■「基金ニュースレター」について  
ご寄付をくださった方に、用途の報告としてニュースレターをお送りしています。ニュース購読費(2,000 円/年)も募っております。印刷・発送などの経費の残金は、募金として使わせていただきます。  
※ニュースレターは子ども基金のHPでもご覧いただけます。今後、郵送がご不要の方は、お手数ですが事務局までご連絡をお願いいたします。  
※発送経費を節約し、なるべく多くのお金を子どもたちの保養や医薬品に活用したいと思います。長期間、ご寄付等お振込みのない場合は発送を停止させていただきます。

■ボランティア募集 ニュース発送作業(年3回:2・6・10月) お手伝いいただける方を募集します。  
次回は、2026年10月中旬の予定です。  
場所:東京ボランティア・市民活動センター(飯田橋駅ビル セントラルプラザ10階)  
※参加ご希望の方は、前日までにメールかお電話でご連絡ください。電話は平日午前10時~午後5時。留守の場合は伝言をお願いします。

＊＊ ご協力いただいているみなさまへ ＊＊  
振込用紙と領収証につきまして、みなさまにお知らせとお願いです。

すべての方に振込用紙を同封しております  
事務作業の都合により、まことに勝手ながらすべての方に郵便払込用紙をお送りしております。決して募金を強要するものではありません。また、すでに通信費・寄付金を納入された方はどうぞご容赦ください。

## 払込取扱票のお名前・ご住所は楷書で ご記入ください

郵便局からは払込取扱票のコピーが届きます。文字がかすれて判読しづらい場合がございますので、楷書でわかりやすくご記入ください。

## 「受領確認の葉書」をご希望の方へ

通信費・寄付金を納入された方で受領確認の連絡をご希望の方に、葉書(金額は記載せず)をお送りします。振込用紙の該当欄に印をつけてください。

## 「領収証」が必要な方へ

郵便局払込取扱票の「払込受領証」は公に認められる領収証です。大切に保管ください。別途領収証がご入り用の際は振込用紙の該当欄に印をつけてください。

## ★編集後記★

5/23講演会には 200 名を超える方々にご参加をいただき、アンケートには 82 名の方々よりご回答をいただきました。子ども基金のイベントに初めて参加された方も多かったようでした。共催をいただいた明治学院大学国際平和研究所さま、宣伝にご協力いただいたみなさま、そして当日会場でお手伝いいただいたボランティアのみなさま、本当にありがとうございました。私たちはこれからもチェルノブイリ事故の被害を伝え、子どもたちの救援活動を続けてまいります。(事務局)

## ●チェルノブイリ子ども基金 NEWS 年3回(2・6・10月)発行●

住所 〒177-0041 東京都練馬区石神井町 3-16-15-408

Tel/Fax 03-6767-8808

E-mail: cherno1986@jcom.zaq.ne.jp

◇ウェブサイト <http://ccfj.la.coocan.jp/>

◇事務局ブログ <https://chernobyl1986.hateblo.jp/>



※当基金は任意団体のため、ご寄付は税金控除の対象とはなりません。ご了承ください。